

松村通信第 1 4 8 号

5 月 20 日

松村勝弘

客観性・数値化

客観性の落とし穴 前回、村上靖彦『客観性の落とし穴』¹⁾という本を読んだら、次々と読みたくなった、と書いた。で、まだまだ読んでいる最中である。でもまず『客観性の落とし穴』そのものに何が書いてあったかを、拾い読みしつつ、私に関心のあるところを中心に紹介し、次に進みたい。

先にこの本の目次をあげておこう。

第 1 章 客観性が真理となった時代

第 2 章 社会と心の客観化

第 3 章 数字が支配する世界

第 4 章 社会の役に立つことが強制される

第 5 章 経験を言葉にする

第 6 章 偶然とリズムー経験の時間についてー

第 7 章 生き生きとした経験をつかまえる
哲学

第 8 章 競争から脱却したときに見えてくる風景

各章の内容は、著者によって次のようにまとめられている。これも紹介しておこう。

「第 1 章と第 2 章では、私たち一人ひとりの生きづらさの背景に、客観性への過度の信頼があることを指摘した。……

第 3 章と第 4 章では、数値が過剰に力を持った世界において、人々が競争に追いやらせる様子を描いた。……

科学の進展にともなって客観性と数値に価値が置かれ、個別の経験の生々しさが忘れられがちになった。ただし、一人ひとり異なる個別の経験をその人の視点において尊重することは、困難を抱えすぎ間へと追いやられた人の声を聴く努力と一体である。第 5 章から第 7 章までで、このような人の声を聴くことについて考えてきた。語りを細かく読みとることで見えてくる経験のひだを第 5 章では示し、第 6 章では生き生きとした経験の内実を、生の偶然性と変化していく多様なリズムという視点から考えた。第 7 章では語りと経験を

捉えるための方法として現象学を提案した。」(149-150 頁)そして第 8 章では「ケアを軸としてコミュニティを作ることはいかなるだろうか」(150 頁)とされる。

数値盲信・統計学信仰 ネットで調べてみると、「客観性の落とし穴? / 村上 靖彦氏・三浦 麻子氏²⁾」という討論が見つかった。村上氏本人が討論者であるので、参考になる。この討論のなかで著者が次のように本書を整理されている。前半では、「客観性」「数値」だけが真実だという近代合理性盲信へのするどい批判が行われている。日本でも数値信仰は進学における偏差値至上主義に典型的に表れている。個人のリアリティそっちのけで、偏差値で人間が測られる。大学でも業績主義が幅を利かせて、論文の本数で業績が測られている。「統計学が力を持つ現状は、自然と社会のリアリティの^{ありか}在処が具体的な出来事から、数字へと置き換わったことの象徴である。」(54 頁)

著者はイアン・ハッキングに依拠しながら³⁾、言う。「とはいえ、科学が偶然性と無縁であるわけではない。実は客観性や普遍性を^{うた}謳う科学も偶然性と縁が深い。近代の学問は、一見するととりとめもなくランダムに生じている偶然の出来事をどのように合理的に理解するのか、という観点から発展してきたとさえ言える。現代医学のスタンダードであるエビデンスにもとづいた医療と呼ばれる標準化をはじめとして、客観性と妥当性を重視する近現代の科学は統計学に依拠している。科学哲学者のイアン・ハッキングによると、統計学とは、世の中が偶然の出来事で満ちていることを認めた上で『偶然を飼いなす』ための学問だ。賭け事、船が遭難する確率、都市部での地区ごとの死亡率、といったさまざまな偶然をなんとか取り押さえようとしたのだ。」(113-114 頁)

確率 かねがね地震予測を疑問に思っていたが、今年の能登半島地震の場合もそうだ。こ

んなことが書かれていた。「2024年1月1日、石川県能登半島をマグニチュード7.6、最大震度7の地震が襲った。県内で2020年から30年以内にマグニチュード6.5以上の揺れが起きる確率は『0.1～3%未満』だったにもかかわらず、だ。⁴⁾」何年以内に何%などと予測されているが、この地震の確率にどれほどの信頼性があるのだろうか。「科学的根拠に基づいて算出されていると思っていた確率が、政治的な決められ方をしていた実態⁵⁾」が暴露されてもいる。

統計学・確率は自然科学だけではなく（自然科学であるはずの地震予測ですら、政策的配慮がなされていることは、前述の記事からわかるが）、社会科学においても活用されている。経済学などでは、回帰分析が大はやりである。統計学を使つてはならないということではなく、どう使うかが問題である。先の注2)で利用したYouTubeで、三浦麻子氏は分散の重要性を指摘していた。

とりこぼし 大量データを統計処理をしても、それは全量調査ではない。取りこぼされたデータのなかに重要なものが含まれている場合がある。データの取り方は慎重に行わないととんでもない間違いを犯すことになる。統計処理された論文を読んでも、実感が伴わないことがある。実感できるというのは、過去の自分の経験からそうなる。経験が浅いととんでもない間違いを犯す。

著者はいう。「統計学は、たくさんのデータを集めて数学的な処理をすることで、出来事という本来偶然かつ個別的に生じるものから法則性を導き出す方法だ。これは学問の重要な成果だ。私たちの生活は、統計学によって偶然を統御することを抜きには成り立たない。一見すると無秩序な自然現象や社会現象のなかに法則性を見つけることで、たとえば天気を予報したり、がんの予後や治療薬の効果、感染症の罹患率などの計算が可能になるのだ。統計学は偶然の出来事に正面から直面するのではなく、少し目をそらして外から眺めることで飼ひならす。しかし、偶然との出会いから生まれる唯一無二の経験や説明を超えた変化を、統計学は考慮しない。」(114-115頁)

経験の重要性 かくて、経験の重要性を指摘する。個別ケースを重視している。「偶然を言葉にしていく語りとは、言葉にしがたい理不尽な現実に対して、最低限納得のいく言葉と行為によって応答する営みだ。見出された言葉は場面に適合しないかもしれないし、違和感が残るかもしれないが、しかし語りきれないことがあること自体もまた経験の重さのしるしだ。経験を語り尽くすことはできない。しかし語ることでしか経験は意味を持たない。このような緊張関係が経験と語りのあいだにはある。」(118頁)「数字による束縛から脱出する道筋を本書は探してきたが、それは数字や客観性を捨てるということではない。繰り返すが、問題は、客観性だけを真理として信仰するときに、経験の価値が切り詰められること、さらには経験を数字へとすり替えたときに生の大事な要素である偶然性やダイナミズムが失われてしまうことだ。『客体化と数値化だけが真理の場ではない』ことを理解する方法が問われている。」(134-135頁)

まだまだ書きたいことがあるが、今回はここまでにして、次回以降さらに深めたい。

1) 村上靖彦 (2023)『客観性の落とし穴』ちくまプリマー新書。

1) ナレッジキャピタル「エビデンスと共に考える『いのち』と『くらし』を豊かにする講座 客観性の落とし穴？」2023/08/25 「客観性の落とし穴？ / 村上 靖彦氏・三浦 麻子氏」<https://www.youtube.com/watch?v=ThrfHV2G55Q>

3) イアン・ハッキング (1999)『偶然を飼ひならすー統計学と第二次科学革命』石原英樹・重田園江訳、木鐸社、14頁。

4) 小沢 慧一「熊本、北海道、そして能登半島…『地震ハザードマップ』がまったくアテにならない科学的な理由 残念ながら、いまの科学でも正確な予測はできない」(PRESIDENT Online, 2024/03/11, <https://president.jp/articles/-/79309?page=1>)

5) 小沢 慧一「『30年以内に70～80%で南海トラフ地震が発生』はウソだった…地震学者たちが『科学的事実』をねじ曲げた理由 行政の都合で『発生確率を下げる』は無視された」(PRESIDENT Online, 2024/03/11, <https://president.jp/articles/-/79308?page=4>)

HP, FBを見て下さい。又何でも意見を。

皆様のご意見を歓迎します。HP (<http://www.ritsumeai.ac.jp/~matumura/>) もご覧下さい。フェイスブックもやってます。また、メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい (matumura@mba.ritsumeai.ac.jp)。